

研究会・部会・委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
食品安全研究会					
食品微生物研究部会	<p>食品産業会が抱える食品微生物関連の共通課題を、部会員が協同で（企業の枠を超えて）研究し解決を目指す。</p> <p>食品関連企業の微生物担当者が業務上の悩みや課題を相談・共有し相互解決できる場として機能する。</p> <p>当部会の研究成果を含む食品微生物に関する安全性等の情報について、広く周知活動を行う。</p>	<p>部会員が集まり定期的に交流や情報交換を行える場としての部会運営の再整備（アフターコロナ対応としての集まる場の整備）</p> <p>新規研究プロジェクトの立案および他機関との積極的な連携の実施</p>	<p>分科会活動</p> <p>(1)芽胞菌研究分科会 ・進捗なし。</p> <p>(2)MALDI-TOF MS 研究分科会 ・進捗なし。</p> <p>(3)チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動 ・活動なし（追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中）。</p> <p>b. 耐熱性試験法検証活動 ・第4弾試験（複数企業で調製した芽胞液による耐熱性試験）結果共有打合せ（1/27, Web開催）実施。打合せ後、对外発表に向け取りまとめる方向性で参加各社の上承を得た。</p> <p>(4)国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会 ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical</p>	<p>各分科会の研究活動に加え、各社が共通に抱える食品微生物関連の課題について、部会全体でのディスカッションおよび関連団体等との連携を通じ、課題抽出と解決策の検討を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・（公社）日本缶詰びん詰レトルト食品協会 ・（独）製品評価技術基盤機構

			Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods"		
食品リスク研究部会	食品の安全性評価の考え方を学び、その普及に努める。	① 食品リスク研究に関する勉強会を3回以上開催し、情報発信する。 ② 「ナチュラルミステイク」の情報発信。	① 2022 年度勉強会の内容について、「イルシー」誌<フラッシュ・レポート>の原稿を作成した。 2/9 (木)勉強会「リスクコミュニケーションにおけるメディアとサイエンス」講師：早稲田大学 田中 幹人 教授をZoomで開催した。参加者 40 名。 2/9(木)に Zoom で部会を開き、勉強会 WG の募集を行った。2023 年後半より、勉強会を開催できるようにしたい。 ② 「ナチュラルミステイク」をジャーナリストや食品リスク研究者への献本を実施した。	① 2/9 の勉強会についても「イルシー」誌<フラッシュ・レポート>を作成する。 勉強会 WG のキックオフミーティングを開催し、スケジュール、テーマを決定していく。 ② 引き続き、献本を行うとともに、アンケートを実施し、先生方からの情報発信を促す。	・早稲田大学
香料研究部会	食品香料の性質と安全性等に関し偏向の無い科学的な調査研究を行う。食品香料に関する正しい科学的共通理解を産・官・学に普及させる。	—	特になし。	—	—
食品領域の動物実験代替推進プロジェクト (AAT プロジェクト)					
全体進捗	<活動目的> 1) 動物に依存しない、毒性発現機序に	・研究 WG テーマ推進による評価技術基盤並びに	・1 月 17 日 シンポジウムプログラムの内容確定に向け、シンポジウムプログラム会議を開催。「ま	・3 月 13 日 プロジェクト全体会議を開催予定 ・日本毒性学会 (6 月)、日本動	・国立医薬品食品衛生研究所、独立行政法人 製品評価技術基盤機構

	<p>基づいた、ヒトへの予測性のより高い評価アプローチを確立し、食品の安全性および機能性評価の精緻化・効率化を進展させること。</p> <p>2) 動物愛護の世界的潮流の中で食品領域の取り組みを加速させること。</p>	<p>評価戦略構築とケースレポートの作成。</p> <p>・情報収集・発信（国際ワークショップ内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催）。</p>	<p>とめ」セッションの内容について検討。</p> <p>・2月6日 動物実験代替推進に向けて ILSI Japan シンポジウムを Web にて開催（詳細は WG 活動報告に記載）</p>	<p>物実験代替法学会（11月）において活動内容の発表を計画</p>	<p>（NITE）、アカデミア等の専門家</p> <p>・関連学会（日本動物実験代替法学会等）</p> <p>・ヨーロッパ、アジア等の ILSI 支部</p>
体内暴露予測ワーキンググループ (WG)	<p>食品成分の体内曝露を、動物を用いずに予測する手法の開発推進と現場実装</p>	<p>① 昭和薬科大学山崎研に構築した in silico 動態予測モデルの実装</p> <p>② 新規腸管吸収予測ツールの適用性把握</p> <p>③ ケースレポート対象化合物の体内曝露予測</p>	<p>① 山崎研の最新予測モデルに基づき、食品成分の動態予測精度を再検証。過去モデルに比して予測精度が同等以上であることを確認。</p> <p>② 新規ツール市販メーカーと打合せ。食品成分への適用に向けた現状と課題、今後の取り組みを確認。</p> <p>③ 進捗無し。</p>	<p>① 動態予測モデルの実装に向けた適用範囲明確化とシステム整備</p> <p>② 新規ツールの適用性把握に向けた取り組み継続</p>	<p>・山崎浩史教授(昭和薬科大学)</p>
データベース WG	<p>食品成分の既存毒性情報(文献等)を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集する</p>	<p>有害性評価支援システム統合プラットフォーム (HESS) を用いた食品成分毒性試験データベース及び</p>	<p>昨年までに 176 種の食品成分に関する毒性試験のデータベース化を完了し、当該データベースによる HESS を用いた Read across の予測精度向上に関する検証を計画中。検証のため、NITE 様にて食品成分の</p>	<p>実施したトライアルに基づき、Read across を実施した 15 成分を対象に原著論文との比較を実施予定。</p>	

	ことも検討する。	使用ガイダンスを含む毒性予測手法のAAT参画メンバーへの公開	Read across を実施。引き続き原著論文との比較実施のため、2成分を対象にトライアル検証を実施した。		
ケースレポート WG	NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略を具体化させ、体内曝露予測 WG とデータベース WG の活動と協力し、in vitro assay 系を加えたリスク評価戦略を作成し、ケースレポートとして発信する。	第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、ラット肝細胞を用いた試験から in vitro PoD を求め、評価スキームの妥当性を検証する。	ヒトでの有害事象報告があり、ラット経口投与試験にて肝細胞壊死が報告され、また、毒性発現機序が明らかであるピロリジジナルカロイドのリデリンを評価対象として選択した。細胞系には、動物実験代替および評価戦略構築の観点からラット肝株化細胞(BRL-3A)を選択し、試験系の妥当性を検証中。	BRL-3A では、凍結肝細胞を用いた文献報告値と比べて毒性発現濃度に関がみられたため、再現性を確認すると共に、リデリンの毒性発現に関与する薬物代謝酵素 (CYPs およびグルタチオン) の活性を確認中。さらに、選択した BRL-3A の毒性評価における限界を確認すべく、検討内容を WG で議論中。	
国際ワークショップ & シンポジウム WG	動物実験代替法における各国の技術・規制動向に関する情報を発信することにより、食品業界における代替法の開発や取り組みの推進を促す。	2021 年の国際ワークショップに続き、公開シンポジウムを開催する。	「ILSI Japan シンポジウム 食品領域の動物実験代替 -現状と動向、未来に向けた取り組み-」を 2023 年 2 月 3 日に Zoom webinar 形式で開催した。産官学および個人から 305 名が参加した。セッション 1 では、ILSI Japan より 2021 年 10 月に開催された ILSI 国際ワークショップの話題を中心に食品領域における動物実験代替に関する現状と国際動向について報告した。セッション 2 では、動物実験代替に関する最新技術および研究動向についてアカデミア	シンポジウムの概要については「イルシー」誌 No.155 (2023 年 8 月)にフラッシュ・レポートとして掲載する予定である。また、今後のワークショップ・シンポジウムの開催に向けた議論を開始した。	

			<p>の第一線で活躍されている先生方（東北大学 神崎先生、名市大 松永先生、静岡県大 吉成先生）からご講演いただくと共に、ILSI Japan から食品の安全性評価に関連する当機構の研究の進捗や今後に向けた取り組みを報告した。最後に、関連する学会にご所属の3名の有識者（日本抗加齢協会 細山先生、日本動物細胞工学会 大政先生、日本動物実験代替法学会 諫田先生）より、食品領域の動物実験代替推進についてコメントをいただき、今後の取り組みについて展望した。</p>		
研究会・部会・委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
バイオテクノロジー研究会	<p>バイオテクノロジーを用いた持続可能な食料の安定供給への貢献を念頭に、バイオテクノロジーの重要性の理解を深め、バイオテクノロジー応用食品・作物・添加物等の安全性・活用に関する調査研究と情報提供を産・学・官連携及び国際的ネットワーク</p>	<ol style="list-style-type: none"> ERA プロジェクト調査報告（年4回） バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品・食品添加物等の安全性に関するワークショップ 	<p>ERA プロジェクト調査報告 No.62号(2023年3月)の発行、官庁を訪問し、内容説明し提供。</p> <p>ERA プロジェクト調査報告 No.63号のレビューのための10報の論文抄録の事前監修及び会員による事前確認。</p> <p>ERA プロジェクト調査報告 No.64号の論文抄録の収集中。</p> <p>ISBR2023 への派遣者ためのロジスティクス、Parallel Workshop においてゲノム編集の規制や国際的試験</p>	<p>ERA プロジェクト調査報告 No.63号のレビュー(3/2)、監修、印刷</p> <p>ERA プロジェクト調査報告 No.64号の論文抄録の収集及び事前監修依頼</p> <p>ISBR2023 への派遣者全体会議のアレンジ-旅程の確認、発表や情報収集の分担等</p>	<p>農林水産省 厚生労働省 内閣府食品安全委員会 環境省 文部科学省 経済産業省 筑波大学環境系 & つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC) 明治大学農学部 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構</p>

	クを通して推進し、科学的根拠に基づく国際的に調和した安全性評価法や活用法の発展に貢献する。	<p>3. 第 16 回 ISBR (International Society for Biosafety Research) 2023 への安全性評価の専門家の派遣</p> <p>4. 遺伝子組換えナタネの ERA に関する研究成果の論文発表</p>	要求のセッションの参加依頼、別途 Bayer Crop Science の研究施設見学の調整等		(農研機構)作物研究部門 横浜国立大学大学院環境情報研究院 千葉大学大学院園芸学部
--	---	---	---	--	---

栄養健康研究会

栄養研究部会	「健康寿命延伸」はグローバルな持続可能な開発目標 SDGs の目標 3「すべての人に健康と福祉を」に合致することから、「健康寿命延伸」をキーワードとした活動を継続する。	<p>「健康長寿延伸」のための最新のエビデンスを継続して発信していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●公開セミナー(有料)を Zoom ミーティングで 1 年に数回開催する。 ●セミナー参加登録者に対しては、オンデマンド配信を実施する。 	<p>2023 年からは、活動テーマを「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは」とし、「世代別の健康と栄養」に関する公開セミナーをシリーズ化して開催する。</p> <p>進捗は、以下の通り。</p> <p>第 1 回公開セミナー開催(6 月)に向け、</p> <ul style="list-style-type: none"> ●1 月 12 日:講師の先生と Zoom 面談にて講演を依頼した(快諾を得た)。 ●2 月 16 日:講師の先生と Zoom 面談にて講演を依頼した(快諾を得た)。 ●2 月 27 日:お二人の講師の先生と 	<p>計画は、以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●6 月:第 1 回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは:妊婦・乳幼児編」 ●9 月:第 2 回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは:成長期編」 ●12 月:第 3 回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは:中高年期編」 ●2024 年 3 月:第 4 回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各 	
--------	--	---	---	---	--

			Zoom 面談にて詳細について打ち合わせた。	世代で解決すべき課題と対策とは：老年期編」	
GR プロジェクト	食品・食事の血糖応答性の簡易評価法（GR法）の確立と普及	GR法の確立・発表 論文発表	論文投稿準備 GR法詳細条件の検討	論文投稿 GR法に関する討論会の開催	
茶類研究部会・ 茶情報分科会	茶樹に係わりその成分の世界的な多様さ、飲料その他商品に係わり各種茶成分の機能性、研究・開発・商品化等につき会員相互間の情報交換を深めると共に、外部からも情報を得る。	—	特になし	—	—

CHP (Center for Health Promotion)

Project PAN (Physical Activity and Nutrition) “身体活動と栄養”プロジェクト	超高齢化が進む国内において、働きざかりの人々や高齢者の健康維持を支援する、運動と栄養の複合プログラムの開発と実践	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ヘルシーエイジングのためのプログラムの開発・普及 ▶ 介護予防教室の開催（自治体、社会福祉協議会、企業） ▶ 地域リーダーの育成（大学、社会福祉協議会、シルバー人 	2022年度墨田区の委託事業「すみだテイクテン教室」の効果についての解析ならびに報告書の作成。 2023年度開催予定の同教室の準備。 共同研究に関する論文投稿の準備。	介護予防教室、地域リーダー育成養成講座の開催。 論文投稿。	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 石巻専修大学 ✓ 鹿児島大学 ✓ 島根大学 ✓ 札幌医科大学 ✓ 東京都健康長寿医療センター研究所 ✓ 国立健康長寿医療センター ✓ 墨田区 ✓ 横浜市社会福祉協議会 ✓ 岩国市社会福祉協議会 ✓ 吉賀町社会福祉協議会
---	--	---	---	----------------------------------	--

		材センター) ➤ 論文等、科学的 成果の発信			<ul style="list-style-type: none"> ✓ 津和野町シルバー人材センター ✓ 益田市シルバー人材センター
Project DIET (Dietary Improvement and Education with TAKE 10! [®]) “途上国栄養改善と栄養教育”プロジェクト	途上国、新興国における官民連携の栄養改善の取組み「栄養改善事業推進プラットフォーム」(NJPPP)のプロジェクトとして、工場など職場の栄養改善プロジェクトを東南アジア各国で推進	➤ フィリピン:「フィリピンの栄養強化米プロジェクト 2022 (調査研究)」	NJPPP 運営委員会でのプロジェクト承認を受け、FNRI との契約、および国内関係部署との三社契約を完了。3月の報告書提出に向け、定期的 Web 会議 (2/2、3/6) を実施し、進捗を確認。	年度末に報告書提出。来年度の展開を考慮し、成果を導く。	✓ Food and Nutrition Research Institute (FNRI:フィリピン食品健康研究所)
		➤ ベトナム:「ベトナムにおける野菜の摂取行動に影響を与える要因調査」	NJPPP 運営委員会でのプロジェクト承認を受け、契約書を締結。ベトナム版TAKE10!による「個性と食事摂取との関連性」を調査。	年度末に報告書提出。来年度の展開を考慮し、成果を導く。	✓ National Institute of Nutrition (ベトナム栄養研究所)
		➤ ミャンマー:「完全オンラインによるブロックチェーン技術を応用した職場における栄養教育」	NJPPP 運営委員会でのプロジェクト承認を受け、契約書を締結。定期的な Web 会議を通じ、導入アプリケーション、インセンティブについて確認。栄養教育ビデオを通じ、参加者に栄養情報を提供。	来年以降、現地企業の CSR 事業として、従業員の健康推進を目的としたプロジェクトとしての展開をめざす。	✓ National Institute of Nutrition
		➤ インドネシア:「インドネシアにおける健康的な食事の普及に関する調査 2022」	健康意識の高い若い女性を対象とし、野菜を身近な存在にすることを目指す。定期的な Web 会議で進捗確認。ミールキットとレシピの提供により、対象者の野菜摂取の向上が見られると同時に食材 (例:ブロッ	年度末に報告書提出。来年度の展開 (ビジネスモデル構築) を念頭に本年度成果を導く。	<ul style="list-style-type: none"> ✓ ボゴール農科大学 (現 IPB Univ.) ✓ SUN Business Network Indonesia

			コリー) による対応の違いも散見されている。3月の報告書期限に向けた対応実施。		
CHP 全体	日本の産・官・学界に蓄積された栄養学、医学、公衆衛生、衛生環境等の分野における科学的知識および技術を、国内および世界的に共通な課題の解決に活用し、SDGsに基づいた社会貢献を行う	<ul style="list-style-type: none"> ➤ SUN Business Network Japan (仮称: SBNJ) 事務局機能誘致に向けた活動継続 ➤ SDGs 貢献プラットフォームの形成 	SBN と戦略パートナーシップ締結に向けて進めてきたが、WFP 日本を通じて、「戦略的パートナーシップについても WHO コードを順守しない BMS 企業の参加団体と協力できない」との連絡を受領。農林水産省、WFP と今後の対応を検討する。	SBN との関係構築により、効率的な情報収集に繋げる。必要に応じて、他の国際団体との関係構築も進める。	<ul style="list-style-type: none"> ✓ Global Alliance for Improved Nutrition (GAIN) ✓ Bill & Melinda Gates Foundation ✓ SUN Business Network (SBN) ✓ World Food Programme (WFP) ✓ アジア開発銀行
研究会・部会・委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
国際協力委員会	アジアの ILSI 各支部間の交流による食品法規動向及びリスク評価等の情報収集・共有化と ILSI Japan 関係者への成果報告	10月開催予定の BeSeTo 会議(アジア地域 ILSI 各支部との情報交換会)への参加、情報交換	<p>進捗</p> <p>1月に本年の会議開催と開催場所が確定されたが、2月は特に進捗はない</p> <p>課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 議案確定への意見出し 2) 参加者、発表内容の確定 3) 会議の新たな名称案の検討 	<p>3月 委員会にて対応を検討開始</p> <p>議案確定への協力</p> <p>4月 参加者、発表内容の確定</p> <p>会議参加予定者による対策会議体の立ち上げと始動</p> <p>10月 BeSeTo 会議開催 (台湾)</p>	アジア地域の ILSI 各支部
食品機能性研究会・AI 栄養・機能性研究部会					
AI 栄養機能プロジェクト	実生活から創出される莫大な量のリアルワールドデータについて、最新のデータサ	<ul style="list-style-type: none"> ・フレイル予測モデル論文化 ・フレイルナレッジグラフ作成 	<p>○運営会議 (1/27, 2/24; Zoom) を開催。</p> <p>・23年度活動方針に関して、フレイル予測モデルの論文化と社会実装</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・23年度活動方針をブレイクダウンして、スケジュール化する。 ・(AI 創出 WG) 視点を変え、 	国立健康・栄養研究所

	<p>イエンスおよび AI 技術を活用し、様々な生活習慣と健康との関係性を解明することで、一人ひとりに適した情報提供を可能とする AI システムを構築する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ナレッジグラフスキル（育成） ・北大阪健康医療都市（健都）での発信 	<p>（健都発信）の検証、ナレッジグラフのスキル育成と作成の方針で固まった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（和食 WG）食生活実態と腸内菌叢の多様性に関する解析結果を論文投稿（2月）。 ・（AI 創出 WG）NEXIS データからフレイル予測モデルの作成を試みた。変数との相関は示されるも、フレイルに合致する人が少なく、予測精度を高めるための更なるアプローチが必要であることを示した。 	<p>フレイルに重要な因子を推定し論文文化を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3/8（水）15時より AI ディアトロフィ研究部門との合同報告会が開催され、本分科会より3演題発表予定。 ・3/24（金）に運営会議を予定。 	
<p>AI ディアトロフィ研究部門</p>	<p>数千分子種よりなる食品摂取によるヒトの代謝状態を最新のコンピュータ技術と計算科学を活用し、高速で安価に食の機能性・安全性を予測する AI システムを構築する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・代謝モデルの領域拡大 ・機能伝達経路のイジングモデル ・AI 教育 	<p>○東北大と参画企業による報告会（1/23, 2/20：Zoom）が開催され、下記について説明、講義、情報共有などが行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●代謝イジングモデル： <ul style="list-style-type: none"> ・最近の量子コンピュータに関する動向から、計算実行方法と新たなイジングモデルの検討方向性が示された。 ・免疫代謝におけるイジングモデルの活用に関し、細胞実験系の提案がなされた。 ●AI リテラシー勉強会： <ul style="list-style-type: none"> ・Deep Learning について、富谷昭夫「これならわかる機械学習入 	<ul style="list-style-type: none"> ・3/8（水）15時より AI 栄養機能プロジェクトとの合同報告会が開催され、東北大より2演題発表予定。 ・3/27（月）15:00～17:00 に定例報告会を予定。 	<p>東北大学未来科学技術共同研究センター</p>

			門」を用いてご教授頂いた。 ●総説論文の作成： ・総説論文第2弾（食品の品質・栄養・代謝におけるAIの活用に関する）を取りまとめ中。		
情報委員会・編集部会	<ul style="list-style-type: none"> ・調査・研究活動とその成果の発表 ・科学情報の普及 ・国内外の関連機関との交流・連携 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 活動報告配信（年6回） 2. 機関誌「イルシー」の発行（年4回） 3. 「栄養学レビュー」誌の発刊（年4回）（女子栄養大学出版部との共同事業） 4. 種々出版物発刊のコーディネーター 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 2022年11,12月分配信（1月）。 2. 「イルシー」 <ul style="list-style-type: none"> ・153号：発行、ホームページ掲載、お知らせメール配信（2/13） ・154号：編集中（2023年5月発行予定） ・129号～132号（発行より5年経過）をパスワードフリーにしてホームページに再掲 3. 「栄養学レビュー」誌 <ul style="list-style-type: none"> ・119号：発行（2/20） ・120号：編集中（2023年5月発行予定） ・121号：編集中（2023年8月発行予定） 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 部会活動報告の配信（1月、3月、5月、7月、9月、11月） 2. 機関誌「イルシー」の発行（2月、5月、8月、11月） 3. 「栄養学レビュー」誌の発刊（2月、5月、8月、11月） 	

【事務局からのお知らせ】

理事会	<p>第1回理事会が令和5年2月2日（木）に開催された。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 令和5年通常総会審議事項・報告事項 審議事項 <ol style="list-style-type: none"> 1) 2022年事業活動報告及び決算報告書案承認の件 事務局長が各研究会、研究部会ごとに事業活動の報告をし、決算の概要を資料に基づき説明した。 2) 2023年事業活動報告及び収支予算書案承認の件
-----	---

	<p>事務局長が各研究会、研究部会ごとに事業活動の計画及び収支予算の概要を資料に基づき説明した。</p> <p>1)、2)とも異議なく承認された。</p> <p>報告事項</p> <p>1) 本部動向 事務局長から 2023 年本部収支予算等について説明した。</p> <p>2) 広報活動資料 事務局長から広報活動資料について説明した。</p> <p>2. 報告・討議事項</p> <p>1) 第 50 回日本毒性学会学術年会での発表 事務局長が資料に基づき説明した。 積極的な対外活動を勧めるよう意見があった。</p> <p>2) その他 事務局長より年次総会、理事会の 2023 年開催日程の説明をした。</p>
総会	<p>令和 5 年通常総会が 2 月 21 日（火）午前 10 時より Web（Zoom）会議にて開催された。</p> <p>正会員総数 52 名のうち総会出席数 34 名、書面表決 16 名であった。</p> <p>1. 審議事項</p> <p>第 1 号議案 2022 年度事業活動報告及び決算報告案が承認された。</p> <p>第 2 号議案 2023 年度事業活動計画及び収支予算案が承認された。</p> <p>質疑は以下の通り。</p> <p>DVD 出版物の廃棄処分の承認経路について質問があり、保管場所及び販売不振の理由から早期処理が適切と判断し、理事会で承認をもらい、処理したと回答した。</p> <p>一昨年出版した翻訳本の在庫について質問があり、注文の都度印刷し配送する仕組みにしたので在庫の問題はないと回答した。</p> <p>2. 報告事項</p> <p>本部動向の説明 2023 年本部収支予算、ILSI Global Research Program の支部別及び内容別に提案件数について説明した。</p> <p>ILSI Japan 広報活動 会員の皆様の勧誘用に ILSI Japan を紹介する資料を説明した。</p>
事務局	

--	--